

書 評

寺澤 盾『英単語の世界』

(中公新書、2016年)

野 矢 茂 樹

1 よほどうっかり読むと「英単語豆知識集」に見えてしまうかもしれない。少しでもちゃんと読めばそんな印象をもちたはしないだろうが、面白い豆知識が満載なのも、事実である。読むと、ひとに言いたくなる。各章から一つずつ取り上げて紹介してみよう。

“boot”の原義は長靴、あるいはいわゆるブーツである。現在はいくつもの意味をもっており、その中に、イギリスでの使用ということのようであるが、「自動車のトランク」という意味がある。なぜブーツがトランクになるのか。かつて“boot”には「馬車の御者台」という意味があった。これはおそらく御者がブーツを履いていたことによる。御者台の下には荷物入れがあった。そこで“boot”が「御者台下の荷物入れ」になった。それが、乗り物の変化とともに、自動車のトランクの意味に変化した。こうして、数百年かけて、“boot”はトランクという意味を獲得したのである。(第1章「もっとも語義の多い英単語は?」)

本の帯にも問題として出されているが、“a hand of bananas”とはどんな手のことか。バナナのように太い指の手であるとか、指が幾本もたわわに伸びている手というわけではない。バナナの形状が手に似ているので一房のバナナをこう言うのである。ふうむ。知らなかった。(第2章「a hand of bananas はどんな手?」)

なぜカボチャは「カボチャ」と言うのか? まるで落語の「やかん」みたいな問いかけだが、答えは「やかん」のご隠居より面白い。この野菜がカンボジア原産と思われたためだというのである。そこで原産地の地名がその野菜の名前に転用された(メトニミー)。「カンボジア」を繰り返しながら「カボチャ」に変形させていくとなんとなく口元がにやにやしてしまう。あ、これは英単語の話題ではなかった。まあ、よい。(第3章「bottleを飲み干す」)

“silly”という語はもともとは「幸福な」「祝福された」という意味であったという。ところが、皮肉として使われ続けたために、いまでは皮肉でもなんでもなくストレートに「愚かな」という意味になってしまった。日本語で「おめでたい人」と言うと「能天気な人」を意味するのと同じで、実に、面白い。(第4章「quite a few はなぜたくさん?」)

人に何ごとかを依頼したり要請したりするときに、なるべく押しつけがましくならないように配慮するというのは人情というものであるが、これが語義変化をもたらす。“must”は語源的には「余裕・余地がある」という意味の本動詞であった。古英語の段階で助動詞化が進み、「相手に～させる余裕がある」といった意味を経由して「～してよい」という許可の意味になる。あれ、“must”って「～すべき」じゃないの? と、私などは少し驚くのであるが、もともとは許可だっ

たのが、依頼・要請の場面で押しつけがましくならないように許可の意味の“must”が使われたのである。ちょうどちの奥さんが「明日の朝、ゴミ出してきてくれていいわよ」と有無を言わさぬ口調で私に言うようなものである。そしてそれが繰り返されるうちに、“must”はストレートに義務・命令を意味するものになる。(第5章「youは多義語」)しかし、そうすると、いま押しつけがましくならないように何かをしてもらおうとしたら、どうすればよいのか。もう“must”は使えないのではないか。実際、現代では“must”は義務の意味では使われにくくなっており、おおむね「～に違いない」の意味で使われるらしい。(終章「一語一義主義」) そうだったのか。まあ、英語圏の人に“You must ……”などと言う度胸は私にはないが。

一つ概念を表わすのに、いくつかの語が適用可能だというのはごくふつうのことであろうが、それらの語の間には使われやすさに関しての勢力争いのようなものがあり、そうすると力関係の変遷が見られることになる。例えば「少女」という概念を表わす語として、私などは“girl”ぐらいしか思いつかないが、チョーサーを調べてみると1位が“maid”、2位が“maiden”、3位が“wench”で、“girl”は2回しか使っておらず、「少女」を意味しているのは1回のみであるという。それから200年ぐらい後のシェークスピアだと、1位は変わらず“maid”、2位が“wench”、そして“girl”は3位に躍進する。さらに現代に近づいて、ジェーン・オースティンを見てみると、“maid”や“maiden”は激減し“wench”は皆無。そして圧倒的多数を“girl”が占めている。(第6章「トイレを表す語彙の変遷」)

だからなんだと言われるかもしれないが、面白くないですか？

2 とはいえ、授業でこうした事実だけを伝えたとしても、もしかしたら学生の反応はあまり芳しくないかもしれない。だとすれば、寺澤さんはこうした事実を面白いと思う自分の気持ちを自明視せず、これがどうして面白いのかを、野暮を承知で説明しなければならないだろう。本書には、そうした配慮が若干乏しいという恨みがないでもない。しかし私には、本書全体から、言葉にはこれまでの歴史があり、そしていま現在も新たな方向に動いていこうと揺らぎ続けているのだ、という言語観が立ち上がってくるように感じられる。言葉はけっして固定された言語体系としてあるのではない。先に紹介した“maid”、“maiden”、“wench”、“girl”といった語のせめぎあいを、寺澤さんは「意味のエコロジー」と呼ぶ。まさに言葉が生き物のように捉えられるのである。まるで生物たちのように、はるか昔からの来歴をもち、いまも蠢いている、そんな言語のイメージは、学生たちも面白がってくれるのではないだろうか。(それでも「だからなに？」と冷たい視線を送る学生には、大学に来るなと言いたい。)

終章において寺澤さんは、受験勉強などにありがちな、一つの単語に代表的な一つの意味だけを割り当ててそれを暗記するという単語学習の弊害を説いている。そんな固定化した捉え方では言葉という生き物はつかまえられるはしない。いささか大胆に私の考えを述べるならば、単語の意味を捉えるというのは、そのシニフィエを把握することではない。言葉は、その長い歴史の中で意味を変化させていくだけではなく、現在の使用においても、メトニミー的な変化等、意味はなお流動的で可塑的なあり方をしている。これまでの慣用とそのときの社会的状況と言語使用者たる主体(話し手と聞き手)のあり方の相互作用によって、言葉の意味は揺らぎ、ずらされていくのである。一つ、楽しかった例文を挙げよう。

“I Starbucksed with an old friend who I met again after thirty years.”

コーヒーショップの店名が動詞になっている。日本語だと「スタバする」とでもいったところだろうか。こんな辞書に載っていない語使用が今日もあちこちであぶくのように生まれては消えているに違いない。そんな中から、反復使用された意味が生き残っていく。語はなんらかの固定された意味をそのシニフィエとしてもつのではなく、むしろその場にに応じて適当な意味を生み出す「力」をもっているのである。この意味発生の「力」を汲み取ることができたとき、その語の意味を理解できたということになる。寺澤さんが私のこの考えに賛成してくれるかどうかは分からないが、私は本書を読んで、そんな考えが裏書きされている思いがした。

3 最初に並べ立てたようなことがたんなる豆知識ではなく、もっとずっと面白いことなのだという点に関して、もう一点付け加えたい。こうしたことが分かるということ、それはすごいことである。とはいえ、この驚きはあまりに素人臭い驚きで、専門の研究者には私が何に驚いているのかよく分からないかもしれない。私は、哲学を専門としている。しかも、哲学の問題を解決しようと自分でああでもないこうでもない頭をひねることが基本である。それを研究と呼ぶことが許されるのであれば、いわば実証系の研究ではなく、妄想系の研究である。そんな私の目から見ると、先に紹介したような事実は、面白おかしく紹介することはたやすいけれど、実証することはどれほどたいへんかと思わざるをえない。

例えば、“interest”という名詞は「興味、関心」という原義から「(金銭の貸し借りを伴う)利害関係」という意味が派生したとあるが、そこにさりげなく括弧でくくって「1452年初出」と書いてある。さらに「利子、利息」という意味も派生するが、そこには「1529年初出」とある。あるいは、“virus”が「コンピュータに入り込んで悪さをするもの」という意味で使われたことには「1972年初出」とある。「初出」ということを調べるにはそれ以前には存在しないということ調べねばならない。かつ、録音されていない日常の会話や残されていない何気ない文章は別として、すべての文献に当たらねば言えないのだ。もちろん、寺澤さんはこれまでの研究の成果を利用しつつ、自分の研究を上積みしていつているのだろうが、そうしたこれまでの研究も含めた、その膨大な努力に、天井をじっと見つめて妄想に耽るだけのものぐさな哲学者はいささか呆然とするのである。

4 最後に、私の妄想にも少しおつきあい願おう。

第2章ではメタファーが扱われる。そこでコミュニケーションに関する英語表現を見てみると、例えばこのような表現がある。

We cannot possibly put our thanks into words.

文字通りに言えば「感謝を言葉の中に入れる (put)」のである。あるいは、“contain”、“cram”、“convey”、“extract”といった語彙も用いられる。表現したい内容を言葉にこめたり、運んだり、取り出したりするという、いわば言葉を容器のように捉えているのであり、ジョージ・レイコフの概念メタファーの言い方をすれば「導管メタファー」である。それに対して、日本語は言葉を液体のメタファーで捉える傾向があるという。例えば、「本音を漏らす」「愚痴をこぼす」「デマを流す」「言いよどむ」「外来語が氾濫している」「悪口を浴びせる」「こぼれ話」「言葉があふれ

出る」「悪口を垂れる」等々。もちろん英語にも液体メタファーでコミュニケーションを捉える場合はあるし、逆に日本語の場合でも導管メタファーは見られる。しかし、傾向として言えば、英語は導管メタファーが優勢であり、日本語は液体メタファーが優勢であるという。

私などは、こういう指摘を読むとおおいに感心し、たちまちにして妄想のスイッチが入ってしまう。学術性ゼロのたわごとを垂れ流すのも気が引けるが、少しだけ述べさせてもらいたい。

俗説かもしれないが、英語は名詞に重きをおき、日本語は動詞に重きをおくと言われる。形容詞も含むだろうから、動詞というより、述語と言うべきだろうか。そうだとすれば、名詞に重きをおくという言い方も「主語に重きをおく」と言った方がよいのかもしれない。そして、もしそれがある程度正しいのだとしたら、そこには「主語中心的言語観」と「述語中心的言語観」とでも呼びうるものがごく自然に（必然的にとまでは言わないが）伴ってくるように思われる。

名詞の意味を考えるときの一つの捉え方は、名詞はある対象を指示するというものである。固有名詞や確定記述句であれば、個人や個物を指示するだろう（「寺澤盾」や『英単語の世界』の著者）は一人の特定の人物を指示する）。そこで一般名詞が指示する対象は何かと考えたとき、一つの考え方は、イデア的な普遍者を一般名詞の意味とする、というものである。例えば「犬」という語の指示対象として、個々の犬の個別性をすべて削ぎ落とした犬のイデアないしそれに類するものを考える。イデアという考え方を避けたいのであれば、心理的なアイテムであることを期待して「犬の一般観念」と言ってもよいだろう。哲学的にも問題があるこうした立場に英語使用者がコミットしていると言いたいわけではない。しかし、無自覚であるにせよ、そうした方向へと言語使用者の感覚が傾きがちであることは確かだろう。名詞は、その意味としてなんらかの対象が想定されがちであり、それゆえ一般名詞の場合にはその一般性を掬い取るために、一般性をもった対象が自然に想定されがちになるのである。

それに対して、動詞や形容詞はそうした実体的なものよりも、現われや移ろいといった捉え方がより自然に思われる。例えば「走っている」という動詞は、何ものかがある時点において行なっていることを表現している。イデアが無時間的であるのに対して、「走っている」はあくまでも時間の中で起こることである。次の時点では歩いているかもしれない。これに対して「走り」と名詞化すると、普遍化の方向へと向かうことになる。なるほど、「走り」という名詞を用いて「彼女のあのときの走りは最高だった」のようにある時点のできごとを描写することもできるが、しかし、「あのときの走りをもう一度見せてほしい」のように、その「走り」は特定の時点から切り離され、一つの型として普遍化しているのである。

現実にはイデアの影にすぎない。それは現われであり、移ろいゆくものである。まして私たち自身の経験や思いはそうだろう。他方、もし言葉がイデア的な意味と結びつくのだとしたら、そこには、言葉と世界・経験・思いとの乖離が生じる。このことが、導管メタファーと結びついていると考えられないだろうか。導管メタファーとは、言葉を堅い導管として表象し、表現される世界・経験・思いをその導管を流れる流体として表象する。世界・経験・思いよりも、言葉の方が堅牢なものとしてイメージされているのである。これは、言葉をイデア的なもの、実体的なもの、普遍的なものとして結びつける捉え方にほかならない。すなわち、主語中心的言語観は導管メタファーと結びつきやすいのである。

他方、動詞や形容詞はまさに現われ・移ろいゆくものと結びついている。それゆえ述語中心的

言語観のもとでは、言葉そのものが流体的に捉えられる。つまり、液体メタファーと結びつきやすいのである。

さらに言えば、導管メタファーのもとでは言葉とそれが表現するものとの乖離が認められるが、液体メタファーのもとではそのような乖離は生じにくい。一つの単純な言い方をすれば、導管メタファーではまず思いがあり、それを言語化するというステップを経るが、液体メタファーの場合には、思いと言葉が癒着していると言えよう。言葉を口にするには、そのまま思いを漏らすことになる。例えば怒りの表情がまさに怒りの表出であり、怒りの表情そのものが怒りという感情の一部であるように、液体メタファーでは発話が思いそのものの表出となる。

ここに、言語使用の典型を記述に見る記述主義的言語観と言語使用を performative なものと見る言語観の対比が重なる。私としては、後者の言語観により親近感を抱くのだが、それはつまり、私が日本語でものを考えているからかもしれない。

本書は、随所にこんな妄想を喚起する力をもっている。実は、本書に取り上げられている時間のメタファーについても、なんだか私の脳みそはむずがゆくなってあれこれ書きたくなっていたのだが、このあたりで筆をおくことにしよう。でも、一言だけ。なぜ時間に対して左右という言葉が為されないのか。「前後」や「上下」は言うのに。(これはどんな言語でもそうであるらしい。) ほら、なんだか考えてみたくなるでしょう？